研究ノート

高知県日高村大和田の葬儀とその変化

The Realities and Changes of Funeral Services in Owada, Hidaka Village, Kochi Prefecture

UMENO Mitsuoki

梅野光興

はじめに

筆者は，勤務先の高知県立歴史民俗資料館で平成7年に開催された「死と再生の文化」と題した企画展を担当し，その事前調査として平成6年に高知県大川村と日高村で土葬による葬儀を実見する機会をもった[(1)]。その後，平成10年と11年度，国立歴史民俗博物館の第Ⅳ期博物館資料調査委員会「死・葬送・墓制の変容についての資料調査」の調査委員を委嘱され，1960年代と1990年代の葬送儀礼を比較するという課題を頂き，平成6年の葬儀を実見した日高村本郷大和田（おおわだ）の坂本家において，1968年の葬儀について聞き取り調査を行なった[(2)]。そしてこの度は，その10年後の大和田の葬送の変化を報告する機会を頂いた[(3)]ので，これまでの報告と重複する部分も多いが，高知県における葬送習俗の変化の実態のひとつのサンプルとして報告したい。

大和田は高知県高岡郡日高村の集落で，平成25年11月末現在，戸数37戸で人口は78人，2010年農業センサスによると農家数は10戸である。役場や郵便局もある村の中心地から2kmも離れていない。集落内は奥組，中組，沖組の3つに分かれ，奥組は平成11年の調査当時9戸であった。農業中心の集落だったが，近年は勤め人も多い。

葬儀はかつて土葬だったが，近年火葬が多くなり，葬儀の場所も自宅から葬祭会館[(4)]に変化しつつある。本稿では，平成6年と11年に調査を行なった奥組の坂本忠史家の事例を最初に紹介する。坂本家では昭和43年（1968），平成6年（1994），平成18年（2006）と葬儀を行なっているが，いずれも土葬であった。近年の変化を知るために，平成21年（2009）に火葬による葬儀を行なった沖組の山崎勝久家と，平成23年（2011）に葬祭会館で葬儀を行なった奥組の中山正和（ただかず）家の事例を対比させ，変化の様相を把握したい。

1　土葬を守った家―坂本家の場合

まず，坂本忠史家の昭和43年，平成6年，平成18年の3回の葬儀をもとに，この地域の土葬による葬送習俗の流れをみていこう。聞き取り調査は，坂本忠史さん，妻の範子さん，平成11年には忠史さんのおばで高知県吾川郡春野町弘岡下（現高知市）の小川真喜子さんにご協力頂いた。小川さんは大和田出身だが，春野に嫁いでおり，両者の伝承が交じっている可能性もある。

それぞれの死

亡くなられた3人の方をご紹介しよう。昭和43年の葬儀は，忠史さんの祖父・徳治さん，平成6年の葬儀は父の清治さん，平成18年は母の貞猪さんである。昭和43年と平成6年の間には40年近い隔たりがある。昭和43年と平成6年との違いといえば，亡くなったのが家か病院かという違い，そして葬儀社の有無である。ところが，それ以外の部分は驚くほど変化が少ないようにみえる。平成6年と18年の葬儀の間も12年ほど経っている。後述するように大和田地区でも火葬にする家が増えているが，坂本家では，土葬を守ることで，大きな変化は無いようにみえる。筆者は，このうち平成6年の葬儀に立ち会っているので，平成6年の見聞を中心に紹介し，あわせて3回の葬儀の変化にもふれていきたい。

どこで亡くなったか

徳治は昭和43年4月8日午前2時，82歳で老衰のために自宅で亡くなった。2日か3日寝込んだだけだった。朝ちょっと言葉がもつれて変になったが，それから1日しか無かった。弟の貞美と水盃を交わし，医者を呼んで「よう来てくれた。わしの思いが届いた」と言って，地つきの歌（木遣り）を「よいとなーよいとなー」と歌った。足の方から枯れてきゆう（枯れていっている）というか色が変わってきていた。孫には「親の言うことを聞いて太らないかんぞ」と言い，「死ぬるということはうるさいもんじゃ」と言ってあとは言わなかった。

清治は，明治39年7月23日生まれ。平成6年6月10日午前6時12分，老衰のため89才で病院で亡くなった。前日の宵には話もしたが，亡くなる時は何も言わなかったという。

貞猪は，明治41年2月18日生まれ。平成18年5月17日に，3年ほど前から入院していた高知市内の病院で亡くなった。朝方のどに痰がたまったということで忠史さんが病院に駆けつけたが，大丈夫だろうということで引き返したところ，1時間くらい後で亡くなったとの連絡が入った。昔の人がのどが鳴ったら終わりと言っていた。ガラガラつまって音がするんだろうか。そのような最期だったと言う。

湯灌

亡くなった場所の変化によって変わったのは湯灌の主体である。

徳治の場合，湯灌は，亡くなった四畳間で，コンヤのおばさんこと親戚の山根喜代子さんが中心になって娘や嫁が行なった。普通の服を着て，タオルで体をふいて，頭の毛を剃った。男ならひげをそり，女なら化粧をするものだった。

清治の時は病院で亡くなったので看護婦による洗体（せんたい）が行なわれた。実際に入院中に身の回りの世話をするのが看護婦なので，看取った後，看護婦が体をきれいにするのも自然な流れなのだろう。忠史さんたちは看護婦に「出ちょってください」と言われ，外へ出ている間に洗体をしてもらった。それから用意していた着物を着せ，死亡証明書をもらって2，3時間のうちには家に戻った。

貞猪の場合も同様で，湯灌は看護婦が行ない，家から持っていった紋付きの良い着物や肌着を着せて，自家用車で遺体を家まで運んだ。

死の場所が変化したことで，移動中の作法が語られることもある。貞猪の妹の小川真喜子さんは，

病院を出る時は「これからうちへいぬるぞね」，途中では「姉さんの里の前を通っていにゆうぞね」，到着したら「うちへ戻ったぞね」などと声をかけるものと言うが，これは家で死を迎えた場合にはもちろん無かった作法だし，どれほど定着しているかもわからない。

写真1　神前に白い紙

北枕

徳治の場合，亡くなったのが午前2時だったので，朝になってから西枕にした。東床・西床の家は北枕に，北床（床の間が南向き）の家は西枕にする。坂本家は北床なので西枕にしたのである。枕飯を炊いて線香を供えた。死者を猫がまたぐのを忌む伝承は無いので，そのため刃物を置くことはしない。また，畳の並べ方を変えたり，逆さ屏風はしないが，神棚に障子紙を垂らす。こうして四十九日のブク抜け[5]までは神様を祭らない。コップに水を入れ，綿をしめしてお別れをする。これらは，コンヤのおばさんの指導で行なったと思うという。

清治の時は，病院から戻ると，忠史さんの妻の範子さんが布団を敷いて，横たえた。この時西枕にして，枕飯を作った。伝承では北向きのカマドを作り…などと言うが，この時は普通にご飯を炊いた。筆者が実見したものとしては，床の天照皇大神の掛け軸の前に障子紙（半紙）を垂らしてあった（写真1）。

貞猪の時も，一日は布団に寝せるものと言い，西枕にして死に水を取るための水と綿棒，そしてマイマイの線香を焚いた。名前は知らないがご飯を茶碗に盛って箸を立てることも行なった。

死亡通知

家族が手分けして柩の手配や近所への連絡を行なう。近所の人はお見舞い（口見舞い）と言ってお通夜までに挨拶に来てくれる。口見舞いは香典もさげずに，普段着のええのばあ（良いくらい）の服装で来る。昭和43年の徳治の時は電話があったが，それ以前は近所の者が自転車や徒歩で回った。小川さんの話では，必ず2人で行くものだったという。

清治の時も，キョウダイには電話で知らせ，トーマ（葬式組のこと。後述）の人と組長へは「おじいさん，ようなおらなかったき。お世話になります」と範子さんが挨拶に行った。すると，後は近所の人に伝えてくれて，近所の人が挨拶（口見舞い）に来た。そのほか，高知新聞に死亡広告を出した。役場への手続きは忠史さんが行なった。

葬儀社

平成の葬儀からは葬儀社が入るようになった。貞猪の時は，近所に連絡するのと同じタイミングで葬儀社にも連絡を入れているようだ。村内にも業者はいたが，縁のある春野町の宮脇葬儀社に依

頼した。葬儀社によって立派な祭壇が作られるようになり，白装束や葬具の一部も購入できるようになった。費用は130万円で，主な内訳は祭壇80万，柩30万，僧侶に10万である。

葬儀の日程

葬儀までには1日おくのが普通だが，10日に亡くなった清治の場合，12日が日づかえ（友引）でダメだったので，10日のうちに通夜，11日に葬儀を行なった。ただ以前は友引のことをそれほど言わなかったという。

貞猪の場合は，17日に亡くなり，18日が通夜，19日が葬儀だった。

死に装束

死に装束は，白い着物，手甲脚絆，足袋，サンヤ袋などである。サンヤ袋の中には，爪・髪の毛をあの世のお金になると言って入れる。他に孫杖と言って，竹で作った小さなものを入れる。

徳治の妻の亀井の時までは親戚が手分けして縫った。徳治の時も，コンヤのおばさんが縫って着せたものだろうと言う。小川さんの話では，二反のあの世木綿（ガーゼよりましし，サラシのへごな（粗悪な）もの）を買って来て，白い着物，手甲，脚絆，上布団敷布団などを縫う。ハサミを使わずヒキシャキ（歯などで耳を切ってしゃっと裂く）で，尻どめもしない。小川さんが姑に「お母さん，こんなにざっと縫って良いの？」と聞くと「これがいごいて（動いて）破すようなら言うことないわの」と言われたという。小川さんは春野町弘岡下根木谷に嫁いでいるので，これは春野町のことである。

着物は白無垢（白い着物）で左前に着せて，紐を後ろからもってきてキノボリ（結び方の呼称[6]）にくくる（通常はマムスベにくくる）。足袋は買ってくる。小川さんの話では，下着の上に夏物と冬物を重ね着させ，白衣を上に乗せるか羽織らせたと言う。死にそうになったら着物を縫って準備することもあった。

入棺

棺は終戦当時は物資が無かったためか家でこしらえたこともあったが，亀井の場合も徳治の場合も宮脇葬儀社から購入した。貞猪の時は，軽四トラックで宮脇葬儀社へ取りに行った。

棺が来たら入棺する。堅くなったら入らないので，男性が折りこんだ。棺の大きさは体格に合わせて。身近な人が，手を組ませて寝せた。柩に入れる時は，その人の帯を枕にして入れる。

通夜

昭和43年の徳治の時は，座敷の床の前に3段くらいの棚を組み立て，木綿の白い布をかけ，その前に棺を置いた。棺の上には盆を置き，枕飯や線香，水を並べた。この時は遺影はあったが以前は写真も無かった。通夜に僧侶は来ず，隣近所（の人）には茶菓子程度を出した（近所はご飯をすませてから来る）。お参りの後，明日の段取りなどと言って1時間くらい話して帰る。

そして家族は「オトギをする」「オトギ寝をする」「死者といっしょに寝ないかん」などと言って，棺の側で朝まで寝た。

平成6年になると，葬儀社が祭壇を作るようになった。祭壇に遺影を置き，その前に柩を安置，柩の上の盆に枕飯や線香，水を置くのは変わらない。平成になると，僧侶が来て祈るようになった。来た人には，酒，茶菓子などを出すことや家族が棺の側で寝るオトギ寝の習慣は貞猪の時に至るまで変わっていない。

トーマ（ソーレン）組の活動

トーマ組はソーレン組ともいって，提灯・草履・孫杖などの葬具作り，墓穴掘り，料理作りを担当する[(7)]。忠史家の場合，大和田の奥組がそのまま葬送の組になる。各家から男女1人ずつ出る習いで，男は墓穴掘りや葬具作り，女は食事作りである。奥組は約10軒なので，20人程度になる。葬儀社が入るようになってからは，葬儀社が準備する物もある。

葬儀の当日，トーマ組は朝から墓穴掘りと葬具作りを行なう。平成6年の場合，墓穴は深さ1m50cm位の柩より大きめの穴で，縦1間横3尺の孟宗竹の枠木を穴回りに作った（写真2）。道具はツルハシ，シャベル，モッコウ，ノコギリ（土中の根を切る）など葬家のものを使い，これらは四十九日までは山に置きっぱなしにする。穴を掘る前に横で煙を出したら良いと言って小さな火を焚く。火の番は葬式がすむまで穴の横にいる。穴掘りには身持ちの人の亭主は行かれん（行ってはならない）と言った。

写真2　トーマ（ソーレン）組による墓穴堀り

平成6年は，穴を掘る傍らで竹や藁の葬具が作られていた。トーマ組が作った葬具は，提灯，草履一足（棺をかく前後の人が片足ずつ履く），孫杖（50cm位の竹の小さいものを孫の数だけ作る），コマセ（俵などを編む道具のことだが，ここでは竹で似た形の物を作る），棺のかき棒，かく縄（本来左縄だったが，「ようせんようになった」（作ることが難しくなった）と言う），ハチクの旗竿，竹の水桶，ホテであった。一方，葬儀社は，死に装束（白い着物，手甲脚絆，足袋，サンヤ袋），棺，位牌，ハナ（六道とも。銀紙で作った飾りを6本，板に立てたもの，埋葬

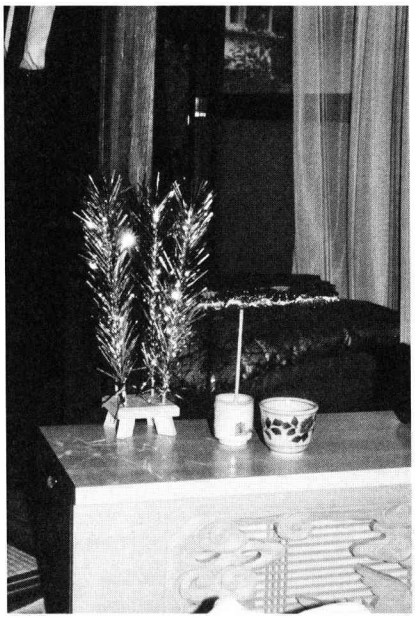

写真3　ハナ

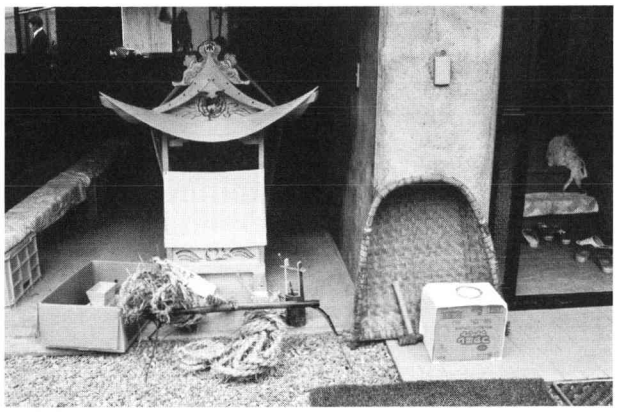

写真4　山草履，コマセ，水桶，日覆い，箕

写真5　トーマ組の昼食

する時棺の上に置く（写真3。ちなみに写真の銀紙の飾りは4本である），旗（宗派に応じたものを準備してくれる）などを準備した（写真4）。

食事はちらし寿司，豆腐のおつゆ，おしらあえなどである。墓穴掘り・葬具作り役のトーマの食事は，これらのものに，酒，ビール，ジュースなどを添えて墓へ持って上がる（写真5）。以前はこれもショウジ（精進料理にする）と言っていたが，今はお刺身をひと皿鉢（さわち）葬家から出している。

食事の準備

葬式当日の昼はトーマ組の婦人が作るが，それ以外の料理は仕出し屋から取り寄せるほか，家の者や身内の者が協力して作る。平成6年の時は範子さんの親戚が作った。料理には米飯や酒は必要。かつてはナマグサはいかんと言い，魚や肉は使わない精進料理だった。内容は豆腐のあげをヌタで食したり，こんにゃく，椎茸，こうや豆腐，こぶ，芋のてんぷらなど。スマキのような魚の入ったものやシナシモノ[(8)]は使わず，ダシや味付けも魚は使わなかった。これらを角い皿鉢に並べた。

最近は刺身の盛り合わせもあるように変わった。

葬儀の祭壇

平成6年は，朝から葬儀社が入り，座敷に祭壇を組み（写真6），庭に庭園風の飾りをセットし，幕を張るなど準備を行なった。祭壇には仏用の小さい本膳を供える。中心に酢の物，左下から時計回りにご飯，おつゆ，お漬け物，しいたけや豆腐など炊いたものを並べた。焼香所は祭壇が見える四畳の縁側の外に設けた。祭壇は花や供物など以前より豪華になった。遺影は故人が生前描かせていた肖像画を用いた。花輪は忠史さんが青年の時からあり，昭和30年代は多かったが，近くは生花に替わってきた。

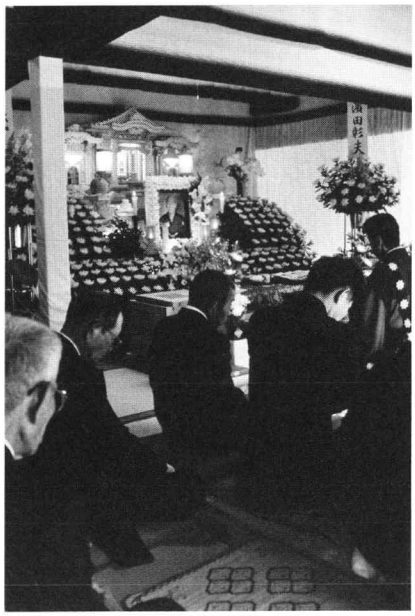

写真6　祭壇

受付

葬儀の受付は身内の者。昭和43年の時は帳面をこしらえてもらったが，

以前は帳面は無く，金封で調べていた。香典はお金で，集計してその家で管理する。香典返しは，昔は名前を書いておいて後で渡しており，葬式の直後に渡すことは無かった。品物を買って返したが，香典返しは20，30年前（調査から10年以上経っているので，30，40年前になるか）くらいから始まったことだと言う。一般的にはお茶などであった。ひじいさんの時などは料理を折りに入れて渡していた。昔は今ほど参列者もおらず，来ても20，30軒くらいのものだった。

平成6年の葬儀でも受付は身内の者が行なった。「御会葬者芳名録」は葬儀社が準備。お金は集計して家で管理。香典返しも葬儀屋が準備するがタオルなどが多い。平成18年の時も同様で，お返しにタオルやお茶を渡した。

喪服

参加者は，昭和43年頃は黒い背広，女性は黒い着物だった。屋外では，喪主や家族・親族の男性はイ草で作ったかぶり物（アミ笠，小川さんの話ではお日さまを恐れるためと言う）を，女性は白い布をかぶる。一般の参列者は黒い服や派手でない服で，今はみんな喪服になったが，昔はそうでもなかった。棺を担ぐ人は藁草履を履いたが，あとは決まりがない。

平成6年時は，家族はもちろん，会葬者もほとんど喪服になった。喪主は黒の背広に黒ネクタイを締め，家族や親戚の男性はヒガサというイグサで作った笠を，女性は白い布をかぶる。トーマ組は作業着や普段着だが，これは平成18年も変わらない。

葬儀

今は12時過ぎたら葬儀を行なうが，昔は午後2時か3時頃で，大正時代は夜にかかっていた。日取りも今は友引を避けるが前はそのようなことも言わなかった。

葬儀の流れは，昔はあまり挨拶も無く，僧侶の読経が終わってからの弔辞や喪主の挨拶も無かった。

それに比べると，葬儀社が司会進行する平成6年の葬儀はかなり形式が整っているといえるだろう。実見した平成6年の葬儀の様子を述べておこう。

家族は座敷とその手前の四畳の間に並び，親戚は西隣の中の間に集まった。会葬者は外庭に立ったり，パイプ椅子に座ったりしている。

葬儀は午後2時半開始。はじめ葬儀社により葬儀が始まる旨を述べる。家族親族一同僧侶にあわせて礼拝，読経は戒名を与えたので成仏してほしいという意味の「引導作法」を読む。読経の間，会葬者は縁側に設けられた焼香所に列を作って順番に焼香する（写真7）。終わった人は中庭に並べられたパイプ椅子に戻ったり，立ったまま葬儀を見守る。3時過ぎに読経が終わると，

写真7　一般会葬者の焼香，向こうは喪主

祭壇の前で家族や親族による焼香が行なわれる。

3時5分，葬儀社が弔電を読み上げる。そのあと葬儀社が故人の人となりや遺族の願いもむなしく89歳で亡くなられたことを述べ,「御苦労の多かったご生涯でありましたけれど，どうか安らかにお眠りください」としめる。

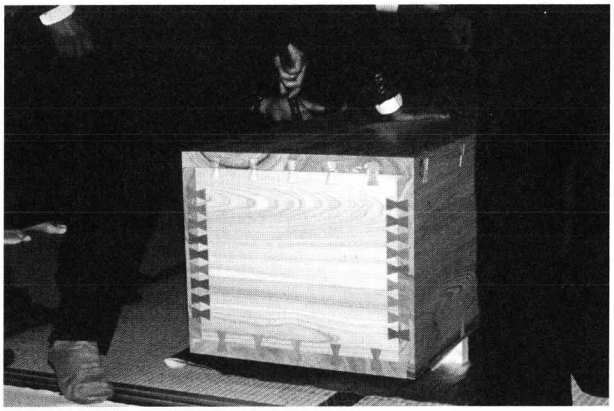

写真8　チキリでとめる棺

3時20分,「それでは以上をもちまして故坂本清治殿のご葬儀ならびに告別式を滞りなく終了させて頂きます」と葬儀の終了を述べ,「合掌，礼拝，おなおり下さい」と全員で礼拝する。これで告別式は終わり出棺の運びとなる。

最後の別れ

葬式が終わると身近な者との別れになる。枕飯をサンヤ袋にお弁当として入れる。サンヤ袋には他に紙の六文銭と爪や髪の毛を入れた。爪や髪の毛は，お通夜の晩に家族や親戚が切って紙にくるんだもので，あの世でお金になるとも言う。ふだんは紙に爪をつまれんと言うのは，葬式の時にするからである。50cm位の竹を孫の数だけ孫杖と言って柩に入れる。飾ってあった生花も入れる。その他，良い着物や大事な物を入れるが金物は入れるもんじゃないと言った。小川さんの話では，その時棺の中に涙を落としてはならないと言い，夫婦の場合は「お父さん，お暇をもらいます」と言う。ふつうの人は「ええ所へ行きよ」などと声をかける。

棺の蓋をするのは孫である。コマ（チキリ）という両端が広い木形を埋め込む（写真8）ことで蓋と本体をつなぐ。金物を忌むので鉄釘を使えないためである。槌を叩くのに間が切れないように叩かないかん（叩かねばならない）と言い，身近な者で槌の音を絶やさないように打つ。しまいをするのは葬儀屋である。

出棺

棺は，座敷から家を出るまでは孫が持ち，外へ出るとトーマ組に替わる。玄関ではなく，表の四畳の縁から頭から先に出す。この時，棺を持つ者2人が一足の草履を片足ずつ履く。かつては棺を舁く人が山（墓）へ行く時は，家の上から草履を履いて降り，草履は山で捨てて来た。この草履を山草履と言って，キノボリにくくらなくてはならないと言う。キノボリに結ぶのは白無垢の紐と同様である。それでふだん家の上から草履を履いて降りるのを忌む。昔はみんな草履だったが，今は棺をはじめにかく2人が形式的に履くだけになっている。

出る時に亡くなった人の名前を呼んで近所の人などが茶碗を割る。平成18年の時も，近所の人に「貞猪さーん」と一声呼んでもらい，生前使っていた茶碗を割った。小川さんの話では，これはお坊さんに引導を渡されて，ここを境に，帰ってきても食べる茶碗は無いぞね，という意味であると言う。

また，棺には故人の羽織を逆(さか)し（逆さま）にかけてあり，家を出る時，他人（近所の忌みがかからん人）が「諸願成就」と言って3回その羽織の裾を持ってふるう。この振った羽織は夜，北向けに干す。小川さんの話では，出棺の時，縁の上から掃く。それでふだんはそれを忌み嫌い，縁の上から掃き下ろすものではないと言う。

棺はいったん庭に置かれ，担う棒にしっかり括りつけられる。この縄は左縄にする。平成6年時は，外でも草履を履いた2人の遺族は最初だけトーマ組と一緒に棺を持っていた。

準備が整うと，棺のまわりを家族や親族が順番に並び，時計と反対に3回回る（写真9）。順番は①ホテ（トーマ組の女性），②杖・笠・草履，③旗（「消滅滅己」「寂滅為楽」「諸行無常」「是生滅法」「故坂本清治殿之霊柩」の5本），④四花，⑤線香立・六道，⑥水タゴ・花立て，⑦花，⑧供え物，⑨遺影（喪主の長男），⑩位牌（喪主）である（写真10）。

それがすむと3時40分頃，喪主が挨拶を行なう。本日のご会葬，生前の見舞いへの感謝，これからも遺族のことをよろしく，といった内容である。

3時42分出発。柩はトーマ組によってかつがれ，先程の順番の③と④の間に入る。急な坂道をなんとか登り（写真11），50分墓に到着した。

写真9　棺のまわりを3回まわる

写真10　ホテを先頭に葬列を組む

写真11　墓地へ棺を運び上げる

埋葬

墓穴の上に棺を置いて，僧侶が，先祖とともにこの地で眠って欲しいといった意味の経文を唱える（写真12）。4時4分，読経が終わると，すぐ棺を穴に入れ，棺の上には六道（ハナ），旗，草履などを置き，担いできた縄も中へ落とす。

最初に喪主が逆手に鍬を持ち土を3度かけると，続いて家族や兄弟が土を入れ（写真13），終わるとトーマ組が埋葬する。20分頃，トーマ組以外の人は山をおりる。34分，土盛りができ，上に拝み石をひとつ置く。これは位牌を置く台となる。位牌には家に置く物と墓に置いてくる物がある。その上からヒオイ（日覆い）を置く（写真14）。ヒオイはひじいさんの時代には一本足の簡単なものであったが，次第に大きなものに変化したという。ヒオイの中に先程の拝み石，その前にお供えを置く石，線香立てを置き，両脇にビニールの花筒（昔は竹の花立て）を挿し，シキビを挿す。左手に水桶を置く。ヒオイの後ろには笠と草履を竹に挿して立てる。そして崖の所に提灯を2つ立てる。この提灯は木の台に竹ヒゴを交差して立て回りを紙で囲んだ簡単なもので，竹に吊す。四十九日まで毎夜灯す習いである。

帰宅

家の入り口にコマセ（本来は俵などを編むための道具の名称だが，ここではトーマ組が作った同じ形をした竹製の作り物）と箕を置く。箕の中には塩の入った小皿と葬送に使ったホテを置いてある。墓から戻った人たちは，コマセをまたぎ，塩で口と体を清め，ホテで体をはたいてから家へ入る（写真15）。

家は，葬儀社によって祭壇は片づけられており，ひな壇式のものに替わっている。遺影と位牌はその祭壇に置かれている。座敷や四畳にはテーブルが並べられ親族に酒や料理をふるまう。トーマは全部すんだあと家に来てもらって酒などでもてなした。ナマグサは無かった。

位牌にシキビを供え，落ち着き膳と言ってお膳をする。小さい黒塗りの膳椀に，ごはん，ナマス，つけもの，コウヤ，しいたけ，おつゆなどを供える。ご飯にふつうの小箸を2本立てる。

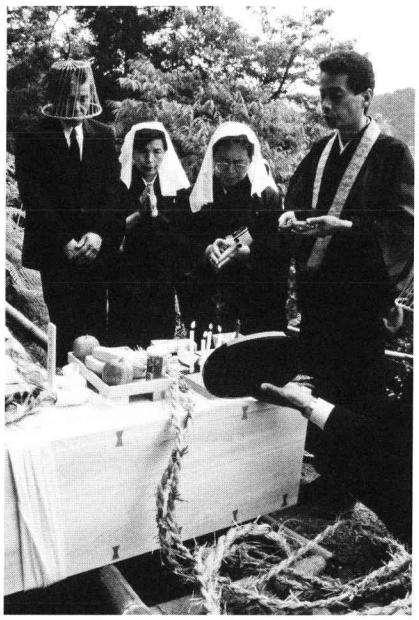

写真12　埋葬前の読経

写真13　家族が逆手に鍬を持って土を入れる

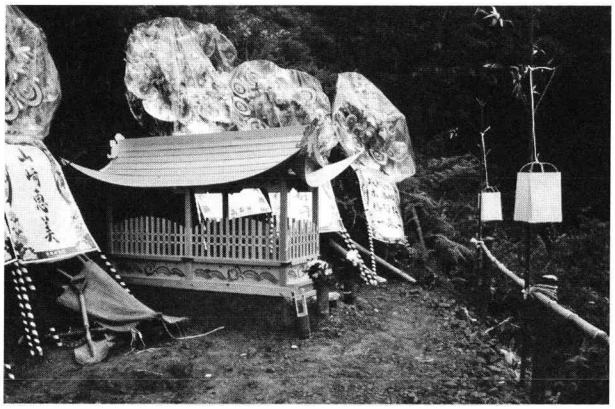

写真14　日覆いを乗せ，回りに花輪を立てる

これは七日ごとにも立てる。

会葬御礼

あとから会葬御礼の札を電柱や掲示板にはる。また組内を挨拶して回る。子供2人で回るものだが，徳治の時は清治，忠史親子で回った。

初七日から四十九日まで

初七日と四十九日にはお坊さんを呼んで親戚一同集まって行なう。近年は葬式当日に初七日も済ませてしまうことが多いが，忠史家では3回とも本七日でやった。

四十九日までは毎日夕方墓の提灯に火をともしに行く。七日から七日ごとに墓参りに行き，小さな板の塔婆を立てる。小川さんによると，七日七日に仏がひとつずつ仏になる修行を行なっているのだと言う。

写真 15　墓から戻るとコマセをまたぎ，ホテでをはたき，箕の中の塩をなめる

四十九日は三月ごしにするもんじゃないと言って，三月にわたる場合は三十五日に四十九日の行事をする。四十九日は人に案内するもんじゃないと言う。あらかじめ葬式の時に，何月の何日何時に行なうと半紙に書いて掲示しておく。

四十九日はまず坊さんの祈り，墓参り，会食という段取り。祭壇には飾りせんべいを飾り（写真16・17），ひと臼餅を搗いてサイコロ状に49個に切る。笠の餅もある。49個の餅を箕に入れてカドで待っておいて，お墓から帰ってきた人に包丁に刺して配る（写真18）。それでふだんは包丁の先で刺したものを人にやるもんじゃないと言う。かつては家で餅を搗いたが平成6年は餅屋に頼

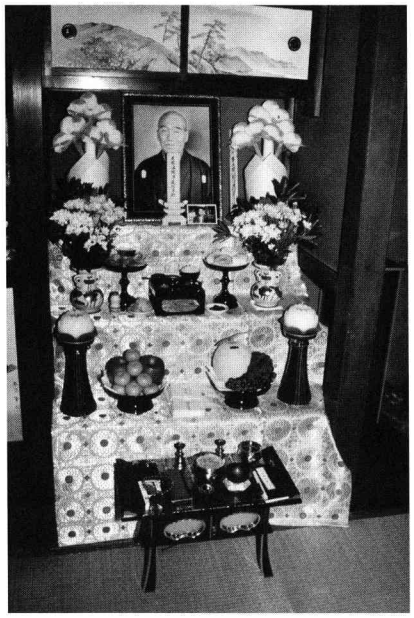

写真 16　四十九日の祭壇

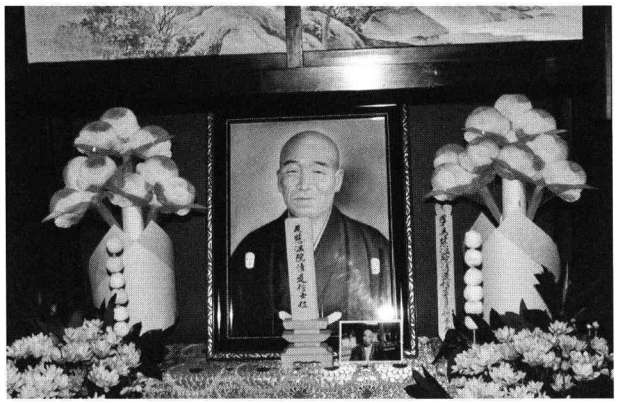

写真 17　四十九日の祭壇

写真18　四十九日，墓から戻ると庖丁の先に刺した餅を食べる

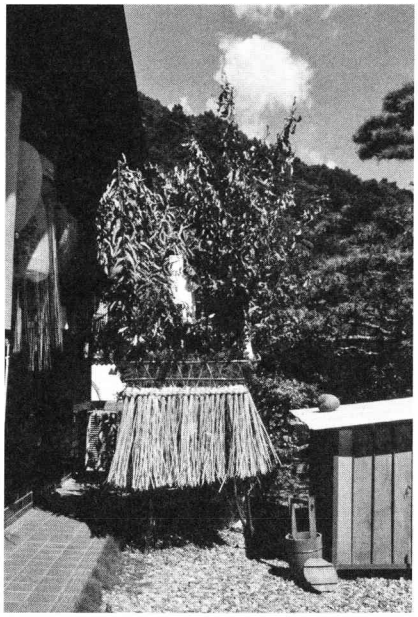

写真19　栗の木を柱にした盆棚

んだ。四十九日が終わるとショーブワケと言って時計や背広などの形見分けをした。

盆

初盆と2年目の盆には水棚を作る（写真19）。8月（かつては旧7月）14日の朝，トーマ組が集まり，葉の付いた栗の木を柱に一年竹で棚を作り，棚にはバショウの葉を敷く（写真20）。盆花としてミズハギを供える。ヒノキの葉もちょっと付けて，棚の下まわりにワラで作ったハカマ状のものを付ける。お坊さんに祈ってもらい，15日には焼く。水棚は迷い仏のものとも言う。屋内の縁側には親戚などから贈られた盆灯籠を下げる（写真21）。

昔は案内盆をするもんじゃないと言っていたが，今は新暦7月，月遅れの8月，旧暦7月とばらばらなので，案内をするようになった。四十九日をしないうちは盆はしない。その時は来年に繰り越す。一軒の家で3年続いて盆をするもんじゃないと言い，初盆の翌年をトボシアゲと言って盆灯籠を焼いて盆は2年で終わりとなる。

写真20　初盆の棚の供物

写真21　盆灯籠

年忌供養

ムコオリと言って一年祭に坊さんを呼んで，身内や近隣で墓参り，会食を行なう。その後7年，13年，（17，27年はする人もしない人もある）33年と年忌をし，50年で弔い上げになる。その間仏様の修行をして段階を踏んでいるという。神になるとも言う。法事には角柱の大きな塔婆を立てる。墓石は3年目か7年目に立てる。50年たつと位牌を寺に預ける。位牌は10年寺で預かると後は処分される。坂本一族の先祖神・坂本神社の祭祀を旧暦11月はじめの寅の日に行なっている。

坂本家の葬儀のまとめ

以上，日高村本郷大和田の坂本家における葬儀の事例をくわしくみてきた。その核となるのは死者をあの世に送るための儀礼である。湯灌，死に水と枕飯，死に装束，入棺，通夜，葬儀（僧侶の読経，参列者の焼香），出棺（一声呼び，茶碗を割る，着物をふるう），葬列，埋葬，初七日，四十九日，初盆，ムコオリ（一年祭）…という流れである。

葬送という特別な時間を作り出すのは，①日常の逆転や，日常において禁忌とされることをあえて行なうという作法と，②ケガレ観念に基づいた作法の大きく二つである。

①には，北枕，ご飯に箸を立てる，死者の着物を縫う時ハサミを使わない，左前に着せる，紐を後ろからもってきてキノボリ（通常はマムスベ）にくくる，帯を枕にする，精進料理にする，丸い皿鉢ではなく角い皿鉢を使う，葬儀の衣服は黒い喪服，サンヤ袋に入れる爪を紙につむ（ふだんは紙に爪をつまれんと言う），棺と担い棒を結びつける縄は左縄になう，墓穴に土を入れる時，鍬を逆手に持つ，四十九日に墓から戻った人に餅を包丁に刺して渡す，などがある。

②には，神棚の前に紙を垂らす，墓穴掘りの道具は四十九日まで山に放置する，葬儀の時に男性の親族はアミ笠で女性の親族は白い布をかぶる，棺をかつぐ人が履く山草履は墓で脱いでくる，出棺の後，縁の上から箒で掃く，埋葬した後ヒオイを置く，墓から戻った時にコマセをまたぎ箕の中の塩やホテで清める，などがある。

葬儀の参加者は，死者との関係性によって，①家族や親戚，②ソーレン組，③その他の参列者に区分され，衣服やヒガサのようなかぶり物などによって区別される。

土葬を守ってきた坂本家の場合は，①死の場所が家から病院へ変化したこと，②葬儀社が葬儀を取り仕切るようになったこと，がこの数十年の大きな変化である。死の場所の変化は，家族の仕事であった湯灌が病院の看護婦による洗体への変化をもたらした。葬儀社が中心になることで祭壇や庭飾りが豪華になり，告別式が葬儀社の司会により進行するようになり，音楽などによる演出，遺族代表の挨拶などの形式が整っていった(告別式の名称も葬儀社の参加の結果かもしれない)。だが，トーマ組の活動をはじめとするそれ以外の部分は驚くほど変わっておらず，死をめぐる観念もまだ大きな変化にはさらされていないようにみえる。

2　土葬から火葬へ，自宅から葬儀社へ—山崎家と中山家の場合

土葬から火葬へ

ところが，大和田集落全体でみると，土葬をやめて火葬になった家や，葬儀を自宅で行なわない家が増えている。坂本家の3回の葬儀と，山崎家と中山家の事例を表1にしてみた。比較しながら

表1　日高村本郷大和田の葬儀の変化

死者の情報

死亡年月	昭和43年4月	平成6年6月	平成18年5月	平成21年	平成23年
死者名	坂本徳治	坂本清治	坂本貞猪	山崎福亀（よしき）	中山家（國澤光子）
生年	明治19年？	明治39年7月23日	明治41年2月18日	明治45年7月	
死亡年月日	昭和43年4月8日	平成6年6月10日	平成18年5月17日	平成21年2月17日	平成23年4月16日
死亡場所	家	病院	病院	病院	病院

葬儀の場所・葬儀社

通夜	家	平成6年6月10日。家で	平成18年5月18日。家で	平成21年2月18日。家で	平成23年4月18日。祭儀場で
葬儀	家	平成6年6月11日。家で	平成18年5月19日。家で	平成21年2月19日。家で	平成23年4月19日。祭儀場で
葬法	土葬	土葬	土葬	火葬	火葬
寺	神宮寺（天台宗）	神宮寺（天台宗）	神宮寺（天台宗）	護国寺（修験宗）	護国寺（修験宗）
葬儀社	使わなかった。	春野町の宮脇葬儀社。130万円（祭壇80万，柩30万，僧侶10万）	春野の宮脇葬儀社	JA葬祭ルミエール・コスモス	枝川葬祭

死者の身繕い

引き潮	死ぬのは引き潮で死に，生まれるのはこみ潮で生まれると言う。			聞いたことがない。	死ぬのは引き潮と言う。よく朝早い時間などに亡くなる。
湯灌	身内（娘や嫁）が故人が亡くなった部屋で行なった。タオルで体をふいて頭の毛をそった。男ならひげをそり，女なら化粧をした。かつては男が縄のタスキをかけてやったとの伝承もある。水を先にとは言わない。	死亡直後30分から1時間のうちに病院で洗体といって洗ってくれる。水を先にといった伝承はない。死後2～3時間で家に帰る。	看護婦がやってくれる。	病院で	病院で。病院の用意した浴衣に着替えた。

死装束	親戚が縫う。この時は死者の娘が縫った。あの世木綿と言って2反ぐらい買ってきて，白い着物，手甲，脚絆，上布団，敷布団などを縫う。ハサミを使わずヒキシャキ（口などで耳を切ってしゃっと裂く）にする。尻どめもしない。白むく，白い着物。左前に着せて，紐を後ろからもってきてキノボリにくくる（通常はマムスベ）。足袋は買った。	棺屋，葬儀屋が準備。	病院で白むく（白装束）に着替え，手甲脚絆も付けた。かつては白むくを縫っていたが，今は葬儀屋が準備。	下は白を着せて，上は紋付きを着せたのではないか。	葬儀社へ移動して紬を着せた。
北枕	朝になってから西枕にした。東床・西床の家は北枕に，北床の家は西枕にする。	病院から戻ってきて西枕にした。	病院から連れ帰って布団に寝せた。	朝4時半頃亡くなり，10時半には家に連れて帰って表の間に北枕に布団を敷いて寝せた。	葬儀社で布団に寝せた。
死に水	コップなどに水を入れ，綿で唇をしめしてお別れする。	コップなどに水を入れ，綿で唇をしめしてお別れする。	水を置いて綿棒で口を濡らすようにした。	湯呑みに水と綿棒。	葬儀社が準備。
枕飯	一般的には丸石を三つ組んだ北向きのクドで一合の飯を鍋で蓋もぜずに炊き，本人の生前の茶碗に一粒も残さずてんこもりに盛り，箸を立て，枕元に線香やお水とともにお膳に入れて供える。	病院から戻ってきて作った。	名前は知らないが，ご飯を炊いて茶碗に盛って箸を立てた。	ご飯を家の者が炊く。箸を立てる。それと湯呑みの水と線香を立てる。	葬儀社が準備。
刃物	なし	なし	なし	なし。母の里の佐川町庄田では，短刀を上に置いた。	なし
蚊帳	清治の妻の妹の話では，死者の上に蚊帳を吊った。足下の一隅を落として三隅蚊帳とした。蝿がたかるからとも猫がまたぐからとも言った。	なし	なし	なし	なし
神棚	障子紙（半紙）を四十九日のブク抜けまで神棚に垂らす。	障子紙（半紙）を神棚，床の間にたらす。	葬儀屋が神棚に白い紙を張った。	坊さんが来てから白い紙を張った。	自宅に死者は戻らなかったので貼らなかった。

死亡通知など

死亡通知	電話で家族が連絡。電話以前は近所の者が自転車で回った。必ず二人で行くものだった。	電話で。キョウダイ，トーマと組長。	電話	10:30に帰宅してから連絡した。	電話

口見舞い	近所の人はお見舞いと言ってお通夜までに挨拶に来る。口見舞いは香典も下げずに普段着のええのばあ（良いくらいの）で来る。	近所の人が口見舞いに来てくれる。	組の人が物を言いに来てくれる。	口見舞いに行くといって近所はその日のうちにお悔やみに来てくれる。顔を見て声をかける。「ことうちゅう」「ひとつもかわっちょらん」など。	なし。お通夜に来る。
耳ふさぎ	この時は無かったが，忠史氏が小学校の時，同級生が死んで，ハガマの鍋の蓋を耳にあててもらったことがある。	—	—	聞いたことがない。	聞いたことがない。

通夜

通夜	死亡の当日だが遅い時は翌日。僧侶は来ない。オトギをする，オトギ寝をする，「死人といっしょに寝ないかん」などと言って，柩の側で朝まで寝た。隣近所は１時間くらいで。お参りをすませて翌日の段取りを行なって帰る。	僧侶が来る。オトギをする，オトギ寝をするといって，棺のそばで朝まで寝る。	一晩布団でヨトギをした。	ソーレン組は通夜の晩に葬式の段取りをする。その晩，死者の兄弟は「この世の最後のトギをする」と言って一緒に横で寝た。	ヨトギをすると言って一緒に寝る。遺体は直接会館に行った。1階が祭儀場で２階が家族の控えの間になっている。はじめは２階で一緒に寝たが，お通夜の朝納棺し，１階の祭儀場に安置したので，その晩は家族は遺体と別に２階で寝た。
通夜の場所	家	家	家	家	葬祭会館
通夜の遺体	棺に納めてある。かたくなったら入らないので，入らない時は男性が折り込んだ。	棺に納めてある。	納棺していた。	棺に納めてある。	納棺していた。
通夜の祭壇	座敷の床の前に三段くらいの棚を組み立て，木綿の白い布をかける。その前に柩。昔は写真もなく，柩の上に盆を置き，枕飯や線香，水を置いた。徳治の時は遺影はあった。	葬儀屋が祭壇を作り，遺影を置き，その前に棺。棺の上に盆を置き，枕飯や線香，水を置いた。	葬儀社が準備	葬儀社が準備	葬儀社が準備
通夜の飲食物	酒，食事。隣近所には茶菓子程度。	酒，茶菓子など	お茶や茶菓子程度	普通は茶菓子程度だが，県外の兄弟一家も帰って来たこともあり，皿鉢を取り，近所の人も交えて飲み食いした。	葬儀社がお茶，お菓子を準備。親戚は軽い夕食。

葬具の準備

棺	葬儀屋。終戦頃は物資が無かったためか家で作っていたが徳治の時は春野の宮脇葬儀社で。	葬儀屋	葬儀社へ取りに行った。	葬儀社	葬儀社
位牌	売っていたり，坊さんが持ってきたことも。松の板でこしらえたことも。	葬儀屋	坊さんが家で書いてきてくれる。	葬儀社が準備するが，通夜の晩，坊さんが取って帰って戒名を書いて来たのではないか。	葬儀社

四花	ハナとも六道とも言って，板の上に銀紙で作ったものを６つ立てた。	葬儀屋。ハナともロクドウとも。	あったと思う。	銀紙の飾りはあった。	葬儀社
旗	書くのはお坊さん。	葬儀屋	葬儀屋	寺が用意して，笹につけた。	なし
孫杖	棺の中に入れる。	トーマ組。竹で作った小さなものを，さんや袋に入れる。	孫杖も作った。	トーマ組。幅２㎝，長さ15～20㎝の竹を孫の数だけ準備。棺に入れたのではないか。	なし
さんや袋	紙の六文銭，爪と髪を入れた。孫杖は50㎝くらいの竹の小さい物を孫の数だけ作る。	爪・髪の毛はあの世のお金になるといって入れた。六文銭は紙。枕飯も入れる。	髪や爪をつんで，おにぎりを入れる。お通夜の時，爪や髪を切って小さな紙に包んでおく。昔はよけい入れたらお金になると言った。	爪を切って入れた。六文銭はわからない。	爪がお金になるということで，通夜の晩に切って入れた。

トーマ組の仕事

葬具作り	棺を担う縄は左縄になう。	トーマ（ソーレン組）＝奥組の人。提灯，草履一足，孫杖，コマセ，かき棒，かく縄，旗竿，竹の水桶，ホテなど。	かき棒，かく縄，ハチクの水桶	竹の笹，ホテ，孫杖などの準備。	トーマ組には頼まなかった。
墓穴掘り	トーマ組。ソーレンとも言うが，トーマということが多い。家１軒から男女一人ずつ出る。穴掘りは男が中心。ただし穴掘りには身持ちの人の亭主は行かれんと言った。	トーマ（ソーレン組）＝奥組の人。家から男女一人ずつ出て，穴掘りは男性中心。	男の人は穴掘り。女の人は炊事。	火葬なので，墓の掃除をする程度。	火葬なので，なし。
墓穴の大きさ	深さ１ｍ50㎝位の柩より大きめの穴を掘る。	深さ１ｍ50㎝位の柩より大きめの穴を掘る。孟宗竹で縦１間横３尺の枠木とする。	人の背丈ぐらいの穴を掘った。	枠はカドが欠けんためにする。	—
墓穴掘りの道具	ツルハシ，シャベル，ノコギリ，モッコウ，鍬など。葬家の道具を使い，四十九日までは墓に置きっぱなしにする。	ツルハシ，シャベル，ノコギリ，モッコウ，鍬など。葬家の道具を使い，四十九日までは墓に置きっぱなしにする。	ツルハシ，シャベル，ノコギリ，モッコウ，鍬など。葬家の道具を使い，四十九日までは墓に置きっぱなしにする。	カマ，ノコギリ，ホウキ。その日のうちに作業場へ移動して普段通り使った。	—
墓穴掘りの食事	トーマ組の女性が作る。料理を葬家で作り山に持って上がる。ちらし寿司，おつゆ（豆腐），おしらあえ，酒，ビール。	トーマ組の女性が作る。料理を葬家で作り山に持って上がる。ちらし寿司，おつゆ（豆腐），おしらあえ，酒，ビール。お刺身は皿鉢で取り寄せる。	ご飯，お酒，ビール，お汁，おしらえ，おすあえ，お刺身も一皿鉢付ける。	仕出し屋の折りの弁当。酒，お茶。	—
墓穴の火	穴を掘る前に横で煙りを出したらよいといって小さな火を焚く。	焚き火を焚く。	穴を掘る時は魔除けの煙を焚く。	葬式には煙がたつものだが，今回はやっていないかも。	—

葬儀

受付	受付は身内の者。この時は帳面をこしらえていたが，以前は無く，金封で調べていた。	身内が担当。帳面（「御会葬者芳名録」）は葬儀屋が準備。	親戚	娘や関係者，近所の人	孫，親戚（孫はするもんじゃないとも言うが）
香典	お金。集計してその家で管理。	お金。集計してその家で管理。	その家で	その家で	その家で
香典返し	昔は名前を書いておいてあとで渡していた。葬式の直後ということはなかった。品物を買って返したが，香典返しは20～30年前から始まったこと。一般的にはお茶など。ひじいさんの時は料理を折りに入れて渡していた。昔は今ほど参列者もいなかった。来ても20～30軒くらいのもの。	その場で葬儀屋が準備した物を渡す。	葬儀屋がタオルやお茶を準備する。	葬儀社が準備。お茶だった。	葬儀社が準備。海苔にした。試食もあった。
祭壇	西枕で，生花・枕飯。線香も。	葬儀屋が祭壇を作る。花，供物など豪華になった。遺影は故人が生前描かせていた肖像画を置いた。	あくる日，朝から葬儀屋が入って，幕を張ったり祭壇を作ったり。遺影はとおから（早くから）訪問して注文をとる業者に頼んで肖像画を描いてもらっていた。	通夜の祭壇をそのまま使用	通夜の祭壇をそのまま使用
花輪	ちったああった。	20近くの花輪があった。	近くは生花に代わった。造花の花輪もいくつかあった。	昔は花輪じゃった。生花はここ10年ばあのこと。この時は花輪は2つぐらい，生花は家の中に。それほど多くはなかった。	造花の花輪はなし。
棺	好きな物を入れるということで，一升瓶の酒を入れた。良い着物，大事な物を入れる。履物も揃えて入れ，靴を入れた。金物を入れるもんじゃないというので，時計は入れなかった。その人の帯を枕に入れた。	好きな物，良い着物，大事な物を入れる。金物を入れるもんじゃない。	黒い紋付き，春物・夏物を足下に置いて，帯は枕に。手甲脚絆，さんや袋。	帯の枕は覚えていない。	浴衣の上に白い着物を着せたように思う。日記帳や筆記用具，ハンカチなどふだん使うようなものを入れた。帯の枕は知らない。

葬儀の服装

喪主の服装	喪服。イ草で作ったかぶり物（アミ笠。お日様を恐れるためとも。初七日や四十九日まで使う）	黒の背広に黒いネクタイ。イ草で作ったヒガサをかぶる。	左と同じ	喪服で笠をかぶる。	黒い背広
家族の服装	男女とも黒い服。男性はイ草のかぶり物，女性は白い布をかぶる。	男女とも黒い服。男性はイ草のかぶり物，女性は白い布をかぶる。	左と同じ	男は笠，女は白い布	洋服。着物を着る人はほとんどいない。

参会者の服装	黒い服や派手でない服。今はみんな黒服になったが昔はそうでもなかった。	喪服	喪服	喪服	喪服
トーマ組の服装	作業着	作業着や普段着	作業着	普段着	喪服

葬儀の流れ

葬儀	午後２時か３時に葬儀。大正時代は夜にかかっていた。今は 12 時過ぎたらやる。	午後２時半，葬儀社から葬儀開始の言葉。礼拝の後，僧侶の読経。「引導作法」と言って戒名を与えたので成仏してほしいという経文だと言う。同時に参拝者は焼香所で焼香。３時過ぎに読経が終わり，家族による焼香が行なわれる。３時５分，葬儀社が弔電を読む。３時 20 分に告別式は終了。家族による最後の別れの後に出棺。庭に棺を置き，葬列が３回まわってから墓地へ。埋葬後，家へ戻った。	大体平成６年の時と同じだったと思う。午後，葬儀を行ない，終了後土葬にし，家へ戻ってから食事。	火葬場の時間で葬儀の時間が決まる。家の母屋で葬儀を行なった。初七日法要まで行なったので，10 分ほど余計にかかった。家の前まで霊柩車が入り出棺した。家族や身近な者は越知町の火葬場へ行った。焼くのに何時間かかかるので一度帰宅し，皿鉢料理を食べた。そして連絡を待ってお骨拾いに火葬場へ戻った。	11 時から 12 時半位まで祭儀場で葬儀。家族や身近な者は越知町の火葬場まで行き，2，3 時間待つ間，火葬場で弁当を食べた。祭儀場で待つ近所の人には皿鉢や酒などを出した。家族はお骨を拾って祭儀場へ戻り，一緒に精進落としを行なった。
蓋をする	身近な者で，槌の音を絶やさないように棺を打つ。	棺のふたをするのは孫。間が切れないようにツチを叩く。	棺は金物を使わんということで，コマのようなものでとめる。	火葬なのでベニヤ板の棺だろう。鳴りやまんようにタンタンタンタンと釘を打った。	金槌２個か３個で家族や親戚が交替で釘を打つが，一人は音が切れないように叩き続ける。
棺を出す	座敷から庭に出るまでは孫が持ち，外へ出るとトーマ組に代わる。玄関ではなく，表の四畳の部屋から頭を先に出す。	玄関ではなく，表の四畳の部屋から出す。	運び上げるのは孫がかき出して，ソーレン組が受け取る。	孫が肩を貸さないかん。	霊柩車に乗せる時はトーマ組が手助けしたのでは？
羽織をふる	家を出る時，他人が「諸願成就」と言って３回羽織の裾を持ってふるう。	屋内から屋外へは孫が持ち，外へ出るとトーマにかわる。棺が家を出る時，棺に逆さに乗せた羽織をふるう。	羽織を柩にさかしに乗せて出る時ふる。	柩の上には紋付きの羽織るもんを乗せる。意味はわからないが羽織をふるう。もう終わりというような意味だろうか。	羽織はふった。
山草履	棺をかく人は，家の上から草履を履いて，山で捨ててきた。この草履を山草履と言って，キノボリにくくらなくてはならない。ふだん家の上から草履を履いて降りるのを忌む。	片方だけ草履を履いた孫２人が最初だけ棺を持つ。もともと家の上から草履を履いて，山で捨ててきた。この草履を山草履と言って，キノボリにくくらなくてはならない。ふだん家の上から草履を履いて降りるのを忌む。	なかったのではないか。	草履はせざった。	なし

3回まわり	柩を庭に置いて，その縁を3回まわる。	棺を庭に置き，まわりを3度反時計回りにまわる。	棺を置いて反時計回りに3回まわる。	3回ば反時計回りにまわった。	まわらなかった。
喪主の挨拶	昔はあまり挨拶もしなかった。	3時40分，喪主の挨拶。	喪主が挨拶をした。	喪主が挨拶をした。	喪主が挨拶をした。
茶碗を割る	亡くなった人の名前を呼んで茶碗を割る。	3時42分，出発。茶碗を割ったはずだが気がつかない。	外へ出す時，一声名前を呼んで茶碗を割る。	柩を外へおろす時，名前を言うて茶碗を割った。	出棺の時に茶碗を割った。
葬列の順序	不詳	ホテ，杖・笠・草履，旗（5本），柩，四花，線香立て・六道，水タゴと花立て，花，供え物，遺影，位牌	不詳	不詳	なし
墓での読経	墓でお坊さんが読経をした。	3時50分，墓に到着。僧侶の読経。	墓で坊さんのお経。	火葬場で柩を下ろして，お供え物をしてお坊さんと親族が拝んで，喪主がスイッチを入れて火を着ける。3時間半くらい（1，2時間とも）かかる。	火葬場でお坊さんの読経。
埋葬	六道（ハナ）を棺の上に置く。旗は穴の中だったり外だったり，縄も埋める。喪主から逆手に鍬を持ち3度土をかける。家族や兄弟がかけてしまうとトーマ組が土を入れる。	4時4分，柩を穴に下ろす。柩で3回地搗きをする（意味は不明）。四花，六道，旗，草履を上に置く。親族が鍬を逆手に持ち，土を入れる。	家の者から順に身内が鍬を逆手に持って一鍬ずつ土を入れる。最後のはしがすんだら後はソーレン組がやる。	—	—
墓上設備	盛り土の上に拝み石をひとつ置き，ヒオイを立てる。昔は一本足の簡素なものだったが，次第に大きなものになってきた。笠と草履1足を竹に突っ込んで墓の後ろに立てる。拝み石の前にお供えを置く石を置き，両脇に花筒（昔は竹）を立てシキビを挿す。線香立ても置く。	4時34分，土盛りができ，日覆いを置く。中に拝み石を置き位牌を乗せる，手前にお供えや線香立てを置く。外には花筒（昔は竹，今はビニール）を立てシキビを挿す。水桶を横に置く。	ヒヨケ？を置いて，葬儀屋が準備した笠・草履を立てる。	—	—
お骨拾い	—	—	—	何人かで骨をひらいに帰る。足の先からひらい，つぶして骨壺に入れる。のど仏を一番上に入れる。骨壺を箱に入れて白い布に包んで家に帰る。	多分左と同じ
コマセと箕	庭の入口で，竹製のコマセをまたいで，箕の上のホテで体をはたき，箕の上の皿から塩を取ってなめる。	庭の入口で，竹製のコマセをまたいで，箕の上のホテで体をはたき，箕の上の皿から塩を取ってなめる。	コマセをまたぎ塩をなめた。	戻ってきた時，コマセをまたぎ，箕の中の塩をなめた。	なし

食事	帰宅したら拝んでもらって料理を食べてもらうが，ナマグサはなかった。	帰宅したら皿鉢を並べ，食べてもらう。	昔（昭和30年過ぎ）は隣近所や親戚が料理を作ったが，今は皿鉢をとる。	トーマ組は出棺後，作業場で，折り（弁当）やジュース，酒，ビールで休んでもらう。家族や親戚は火葬場から戻ったら皿鉢などを飲み食いした。	火葬の間，葬祭会館で精進落とし。
料理の作り手	喪家で。精進料理で，豆腐のアゲをヌタで食すなど。法事用として角皿鉢を使用。こんにゃく，椎茸，こうや豆腐，こぶ，芋のてんぷらなど。	仕出し屋のほか，家の者や身内が協力して。喪家で身内よりちょっと離れた親戚。葬式当日，トーマの食事はトーマ組の婦人。	皿鉢を仕出し屋からとった。親戚はヨウカンを作る程度。	皿鉢を仕出し屋から取って出した。	葬祭会館が準備。
魚	スマキのような魚の入ったもの，シナシモノは使わず，ダシや味つけにも魚は使わなかった。	かつてはナマグサはいかんと言っていたが，さしみの盛り合わせもあるように変わった。	左と同じ	刺身も出した。	ナマグサも出した。
着物を干す	夜，羽織を北向けに干した。	夜，羽織を北向けに干した。	夜，羽織を北向けに干す。普段洗濯物を北向けに干すもんじゃないと言う。	なし	なし
提灯	四十九日まで，毎晩墓の提灯に火を灯しに行く。	四十九日まで，毎晩墓の提灯に火を灯しに行く。	提灯を立て，四十九日まで毎晩火をともす。今は電気になった。	昔は「火をあからしちゃらないかん」と言ってお墓に電気を着けに行った。最初はローソクで，カンチョロ，電気へと変化した。ただ火葬で四十九日まで家にお骨を置くので，墓には明かりをつけなかった。	家の祭壇に電気のローソクを灯した。

法事

初七日	お坊さんを呼んで親戚が集まる。	お坊さんを呼んで親戚が集まる。	お坊さんを呼んで親戚が集まる。	葬儀に引き続いて初七日法要もすませた。	葬儀に引き続いて初七日法要もすませた。
七日ごと	七日ごとに墓に言って供え物を簡単にする。七日七日の小さな板の塔婆を立てる。	左と同じ	七日七日に卒塔婆をもらって家人でお参りしてヒヨケの裏に並べる。	骨壺は祭壇の真ん中に置いて毎日御飯やおかずをお供えする。	四十九日まで祭壇で線香・ロウソクでお祭りするが，ロウソクも最近は電灯に。卒塔婆を7枚くれるので，めくって立てておく。
四十九日	坊さんの祈り，墓参り，会食。三月ごしにするもんじゃないと言って，その場合は三十五日に四十九日の行事を行う。四十九日は人に案内をするもんじゃないと言う。四十九日がすむとショーブ分けと言って時計や背広など形見分けをした。	坊さんの祈り，墓参り，会食。祭壇には飾りせんべいを供える。三月ごしにするもんじゃないと言って，その場合は三十五日に四十九日の行事を行う。四十九日は人に案内をするもんじゃないと言う。	多分左と同じ	昔は四十九日のお参りまでイの笠を使った。四十九日が済むと納骨する。坊さんが祈って，これから納めますということになり，納める場所を開けて，箱から骨壺だけ出して納める。再び坊さんが祈ってみんなお参りして戻ってきて会食する。	四十九日にはお寺さんを呼んで，納骨堂に入れる。親戚やオク組の者は集まって，戻ってから精進落とし。花のせんべいは砂糖のお菓子に変わっている。

四十九日の餅	一臼ついて49に切る。笠の餅あり。サイコロ状に切った餅を箕に入れておいて，山から帰ってきた人に包丁の先に刺して配る。ふだんは包丁の先で刺したものを人にやるもんじゃないと言う。	左と同じ	一升餅を49に分けて，包丁の先でやらないかん。	サイコロみたいに切ったお餅はお返しにやった。包丁を使うことはない。	餅を包丁で刺したりしないかわりにお返しに餅が入っている。別に祭壇に餅は供えた。
盆	旧暦7月14～16日。初盆と2年目の盆には水棚を作る。14日の朝，トーマ組が集まり，栗の木を4本柱に一年竹を添えたり，棚板にし，棚にバショウの葉を敷いて作る。盆花としてミズハギを供える。ヒノキの葉も付けて，棚の下まわりにワラでハカマ状のものを付ける。お坊さんに祈ってもらう。15日には焼く。これは迷い仏のものとも言う。四十九日をしない内は盆はしない。その時は翌年に繰り越す。1軒の家で3年続いて盆をするもんじゃないと言い，初盆の翌年がトボシアゲとなる。	左と同じ	栗の木の盆棚をトーマさんに作ってもらった。2年目のトボシアゲでトーローを焼く。	13日に，栗の枝を柱にした棚を軒下に作る。棚にはバショウの葉を乗せる。オキ組（ソーレン組，トーマ）の人が作った。昔はタイマツを焚いた。7本くらい，二晩火をつけた。家でも水神様，便所とか1本ずつ焚いた。3晩目には集めて「盆飯を炊かないかん」と言って小さいカマドにナベで山の神のお宮のツボで盆飯を炊いて食べたことがある。	人に迷惑をかけたらいかんので，専門の方に棚を作ってもらった。13日の夕方に持ってきてもらって，15日の夕方に焼く。
ムコオリ	ムコオリと言って，一年祭に坊さんを呼んで，身内や近所で墓参り，会食を行なう。	左と同じ	左と同じ	ムコオリ。終了後は皿鉢で宴席。	ムコオリ
墓石	3年目か7年目に立てる。	3年目に建てた。香川県の庵治石で作った墓石を自分で墓地へ上げた。先祖の墓より太い墓はこしらえんと言うので，同じ位の太さにした。	左と同じ	上がっていくのも足腰衰えてきたし，思い切って下へおろした。家の近くの鶏舎のあった土地を新しい墓地にした。	墓を移して納骨堂を作った。
法事	7年，13年，（17年，27年）33年と年忌をし，50年で弔いあげになる。その間仏様の修行をし，段階をふんでいると言う。法事には角柱の大きな塔婆を立てる。	左と同じ	寺（神宮寺）でやる人も。	3年，7年，13年など法事を行なう。33年か50年で位牌をお寺に持っていく。	
弔いあげ	50年忌。神になると言う。位牌も寺に預ける。寺では10年預かると後は処分する。				

大きく変化した部分を述べていきたい。

まず火葬による葬儀の例として，平成21年2月に行なわれた山崎福亀（よしき）さんの葬儀についてみてみたい。福亀は病院で死亡，通夜と葬儀は家で行なったが，土葬ではなく火葬にふされた。

写真22　納骨堂（山崎家）

火葬に変えたのは少し前のことで，山の上にあった墓を家の近くに移し，納骨堂を作った（写真22）。火葬に変えたのは，ほとんどの人が火葬になりだし，「うちもみんなと一緒にそうせないかん」と考えたからだ。足腰が衰えてきて山の中腹にある墓に上がって行くのも大変になってきたこともあり，思い切って墓を降ろし火葬に変えたのだという。

亡くなったのは，午前4時半頃。病院で湯灌を行ない，10時半には家に連れて帰り北枕で寝せた。ご飯を炊き箸を立てて供え，湯呑みの水，線香を供えた。以降，近所の口見舞いや通夜は坂本家の場合と変わらない。

ただ，火葬に変わったことで，トーマ組の仕事内容には大きな変化がみられる。墓穴掘りが必要なくなったのである。墓穴掘りの替わりには墓の掃除をする程度であった。土葬では四十九日まで放置した道具も，鎌，ノコギリ，ホウキなどその日のうち作業場に戻し，普段通り使ったと言う。墓を掘らないので道具に死の忌みがかかると考えられていないのだろう。

女性の仕事も無くなっている。墓穴掘りの現場へ持っていく食事を，トーマ組の女性が作るということもなく，出棺後，仕出し屋の折りの弁当や酒やビール，ジュース，お茶を作業場へ持って行ったと言う。穴の横で焚く火も，葬式には煙がたつものだが，今回はやっていなかった。棺をかくための竹棒や縄も必要ないが，旗をくくりつけるための竹の笹，ホテ，孫杖（幅2cm，長さ15～20cmの竹）は準備した。

家での葬儀ということで，出棺までの作法は坂本家の場合と同様のようだ。初七日法要も葬儀に引き続いて済ませた。出棺にあたって孫が肩を貸す，棺の上に乗せた羽織をふるう，名前を呼んで茶碗を割る，棺を庭に置いて3回反時計回りに回る，などの習俗は行なわれた。ただ，そこから墓地にかつぎあげるのではなく，霊柩車に乗せて火葬場へ運ばれることが大きな違いである。

火葬場では棺を降ろし，供物を並べ，お坊さんと親族が拝んで，喪主がスイッチを入れて火を着ける。喪主がスイッチを入れるのは，埋葬の時，喪主が最初に逆手で土を入れることの替わりだろうか。火葬が終わると何人かで御骨拾いに帰る。足の先からひらい（拾い），つぶして骨壺に入れる。のど仏を一番上に入れる。骨壺を箱に入れて白い布に包み帰宅する。

火葬場から帰ってきた時，土葬墓から戻ってきた時と同様，コマセをまたぎ，箕の中の塩をなめる。家族や親族はその後皿鉢などを飲食した。

骨壺を祭壇の真ん中に置いて毎日お供えをする。昔は「灯をあからしちゃらないかん」と言って墓地に電気を付けに行った。これは最初はローソクで，カンチョロ，電気と変化した。だが，今回は四十九日まで家にお骨を置くので，墓には明かりをつけに行かなかった。

四十九日が済むと納骨する。坊さんが祈って，納骨堂の納める場所を開けて，箱から骨壺だけを取り出して納める。再び坊さんが祈って，みんなお参りして戻ってきて会食する。餅をサイコロ状に切ったものを包丁の先へ刺して配ることはせず，お返しに配った。

盆棚，ムコオリなどの行事は以前と同様に行なわれている。

葬祭会館における葬儀

火葬に加えて通夜も葬儀も葬祭会館で行なった平成23年の中山家の場合は，葬儀の形は更に大きく変化している。

4月16日，死者は病院で亡くなると直接隣町いの町の枝川葬祭に運ばれ，そこで葬儀社の用意した布団に寝，枕飯も死に水も葬儀社が準備した。枝川は大和田から車で30分ほど離れているので，近所の人の「口見舞い」は無く，みな18日の通夜に訪れた（17日は友引なので1日遅らせた）。通夜の接待も葬儀社が茶菓子を準備，親戚は軽い夕食をとった。

そして大きな変化は，墓穴はもちろん，葬具作りも必要なく，一切トーマ組に頼まなかったことだ。19日の葬儀は，作業が無いのでトーマ組も洋服で葬儀に参列した。葬列を組むこともなく，男性が笠をかぶり，女性が白い布をかぶることもなかった。羽織を振る，茶碗を割る習慣は残るが，火葬場から葬祭会館へ戻って精進落としの会食をとったので，帰った時にコマセをまたぐこともなかった。

家では四十九日まで線香・ロウソクを供え祭壇でお祭りするが，ロウソクは最近はロウソク型の電灯に替わった。四十九日にはお寺さんを呼んで納骨堂に入れる。この時は親戚や組の者が家に集まって，精進落としをする。花のセンベイは砂糖菓子になり，餅を包丁で刺すかわりにお返しに餅が入っている。

盆には自宅に祭壇を設けたが（写真23），盆棚はトーマ組に頼まず，近年盆棚作りを請け負って作る人に頼んだ。一年目は大和田に近い人に頼んだので，大和田の盆棚に近い形の盆棚だったが，2年目の平成24年は離れた所の人に頼んだところ，作り方が違っていた。柱が竹になり，箱状の囲いが作られた（写真24。25も参照）。

写真23　盆の祭壇（中山家）

写真 24　集落外の人に頼んで作った盆棚（中山家）

写真 25　日高村中心部で見た盆棚

まとめ

以上日高村大和田における葬送習俗の変化の一断面を見てきたが，これからどのようなことが読み取れるだろう。

別表２は，土葬を守ってきた坂本家の葬儀から読み取れる作法「日常の逆転」「ケガレ観念」などの項目に分けて，いくつかの習俗が，火葬にした山崎家，葬儀自体を葬祭会館で行なった中山家では行なわれているかどうかを一覧表にしたものである。

これを見るかぎり，坂本家では行なっていた数々の作法が，火葬にすること，葬儀を自宅で行なわないことによってほとんど無くなりつつあることが明らかである。特に葬儀の場が自宅から葬祭会館へ移ることによって，逆さまの習俗やケガレの観念はすっかり薄くなってしまったようだ。それは当然で，自宅という日常的な場で葬儀を行なう場合，作法を変える，逆さまにすることで葬儀という非日常の時間を作り出していたのが，はじめから葬儀社という非日常的な空間で葬儀を行なうことによってわざわざモードを変える必要は無くなったのである。

一方のケガレ観念の方も，葬儀の場が家で無くなったこと，墓穴を掘らず当日は墓に行かないこと，葬列を組まないのでお日さまを恐れることもないことなどから，ケガレを認識させるための習俗はすっかり影を潜めてしまったようだ。

火葬骨が四十九日までは家にいることになったのは大きな変化で，遺骨を納骨堂に納める四十九日は節目の時としての意味はかえって強くなったのではと推察されるが，そのことで四十九日間のケガレ観念が強化されたりということは無いようだ。

これら土葬から火葬への変化，葬儀の場所の変化などは，大和田の葬儀や供養の形を大きく変えつつあるが，その背後には社会の変化の影響が見過ごせない。

すべてを葬儀社などに託し，トーマ組に頼まなかった中山さんは「近所に迷惑をかけとうない」と言う。つまり，墓穴掘りや盆棚作りにしても，勤め人には休みをとってもらわなくてはならない。それが申し訳ないというのだ。確かに農家であれば，同じ組の葬儀に仕事を休んで協力しあうことは，金銭の支出を抑える点からも合理的だった。ところが現代では勤め人の方が多い。一方，葬儀屋は，お金さえ払えば準備から何からほとんどやってくれる。火葬にして，式場を葬祭会館にすれば近所への負担はほとんど無くなる。結果としてトーマ組は，墓穴掘り，物作り，食事作りなどの仕事が無くなり，地域の相互扶助によって支えられてきた部分は葬祭業者に移行していくことになる。

表2　葬送習俗の対批

分類	内容	坂本家	山崎家	中山家
		昭和43，平成6，18	平成21	平成23
		土葬＋自宅	火葬＋自宅	火葬＋葬儀社
日常の逆転	北枕	○	○	×
	枕飯	○	○	○
	死者の着物を縫う作法	○→×	×	×
	紐をキノボリに	○	？	？
	帯を枕に	○	？	×
	精進料理	○→×	×	×
	角い皿鉢	○	×	×
	喪服	○	○	○
	サンヤ袋に爪	○	○	○
	棺を担うのは左縄	○	×	×
	逆手の鍬	○	×	×
	四十九日に餅を包丁で	○	×	×
ケガレ	神前に紙	○	○	×
	墓穴掘り道具を49日放置	○	×	×
	アミ笠と白い布をかぶる	○	○	×
	山草履	○→×	×	×
	ヒオイ	○	×	×
	コマセと塩	○	○	×
その他	オトギ寝	○	○	○
	旗・孫杖	○	○	×
	庭で3回まわる	○	○	×
	茶碗を割る	○	○	○
	願ぶるい	○	○	○
	着物を北向けに干す	○	×	×
	四十九日まで墓に提灯	○	×	×

○：行なった
×：行なわなかった　あるいは　知らない
？：わからない
→：時代とともに変化した場合

これに伴い葬儀社がとりこめていない相互扶助の作業である盆棚作りも近年外注が進んでいる。葬祭業者ではないが，村内に盆棚作りを請け負う者が出て来たのである。

このような現象は全国的な傾向だろう。本稿ではそのひとつのサンプルを提示しておくにとどめたい。

【謝辞】

本稿を作成するに当たってご協力頂いた，坂本忠史氏，同範子氏，小川真喜子氏，山崎勝久氏，中山正和氏，そして日高村大和田の方々，日高村役場に記してお礼を申し上げたい。

註

（1）――調査成果は，『死と再生の文化』展示解説資料集［高知県立歴史民俗資料館，1995年］で紹介した。

（2）――本調査の成果は『国立歴史民俗博物館資料調査報告書10　民俗研究部　死・葬送・墓制資料集成　西日本編2』［国立歴史民俗博物館，2000年］に収録されている。

（3）――国立歴史民俗博物館共同研究会「高度経済成長期とその前後における葬送墓制の習俗の変化に関する研究」平成24年度第2回（平成24年9月15日）において「高知県日高村本郷の葬儀とその変化」と題して報告した。

（4）――葬儀社は，平成12年の段階では，日高村内に日高葬祭，伊野町に森田葬祭，伊野葬祭があり，ＪＡコスモス農協日高支所でも葬祭の世話をしていた。その後の動きに関して，ＪＡ全農こうちのホームページを見ると，平成13年12月に高知市に葬祭会館ルミエールこうちが開館，日高村にコスモス営業所が開設している。日高村の営業所は事務所だけで葬祭会館は無く，自宅葬への対応が中心だった。平成19年4月には佐川町に移転し，葬祭会館ルミエールコスモスが開設している。それ以後，現在では葬祭会館での葬儀が増えているとのことである。また，中山家の利用した枝川葬祭の葬祭会館も，建設は5～7年前のことで，やはりそれまでは自宅葬への対応のみであったと言う。この5，6年位で葬祭会館における葬儀が増えてきたことがうかがえる。

（5）――ブク抜けのブクは，『日本国語大辞典』第2版11巻［小学館，2001年］の「服（ぶく）②喪にこもること，また，その期間」の意であろう。

（6）――キノボリは『高知県方言辞典』［土居重俊・浜田数義編，高知市文化振興事業団，昭和60年］には「真結びに対してたて結びのこと。帯やひもなどを結ぶとき，はじめ差しこんだときと，上下を反対に結ぶと，縦になって，きまらない」などとある。

（7）――トーマ組は，高知県中東部の広い範囲で用いられる。『高知県方言辞典』（前掲註6）にも，「墓穴を掘る人。近隣の人がこれに当たる」とある。

（8）――シナシモノは，『高知県方言辞典』（前掲註6）によると「生身のすり身に，少量のうどん粉と玉子を混合して練り，高野豆腐などをつけ合わせ，これを蒸して種々料理したもの」とある。

（高知県立歴史民俗資料館，国立歴史民俗博物館研究協力者）

（2013年12月21日受付，2014年5月26日審査終了）